

あつたつてや

むかし、あるところに、若者が住んでいました。

あるとき、若い女の人がやって来て、

「わたしをあなたの嫁にしてください」といいました。若者は、ひとり暮らしで不自由だったので、

「それじゃあ、嫁になってくれ」といいました。

女の人は、一生けんめい家の仕事をして、いい嫁さんになりました。

ある日のこと、嫁さんが、

「うちの親戚しんせきで法事ほうじがあるので、行かせてください」といいました。若者は、

「ああ、行つておいで」と答えました。そして、「あんたの親戚の法事なら、おれも行こう」といいました。

「いえ、いえ。あなたが行かなくても、わたしひとりですよ」

嫁さんは、急いで出かけて行きました。若者は、

「おれも行くから、待つてくれ」といつて、あとを追いかけました。けれども、嫁さんは、ぐんぐん、ぐんぐん行つてしまつて、すぐに見えなくなりました。

若者は嫁さんを探して、上の原のつつみまで来ました。すると、つつみのまわりに、かえるがぐるっと頭を出してならんでいました。その真ん中に大きなかえるがいました。大きなかえるが、ギヤグ、ギヤグ、ギヤグと鳴くと、まわりのかえるがいつせいに、ギヤグ、ギヤグ、ギヤグと鳴きました。大きなかえるが、また、ギヤグ、ギヤグ、ギヤグと鳴きました。また、いつせいに、ギヤグ、ギヤグ、ギヤグと鳴きました。

あんまりおもしろいので、若者はいつまでも見ていましたが、ふと、

「ひとつ、いたずらしてやろう」と思いつきました。そして、土のかたまりを拾つて、つつみの中にぼしゃーんと投げました。すると、かえるたちは、みんなで、ギヤグ、ギヤグ、ギヤグ、ギヤグ、ギヤグと鳴きました。

若者は、嫁さんも見つからないし、しようがないからもう帰ろうと思つて、帰つて行きました。

夕方、嫁さんが家に帰つて来ました。嫁さんは、

「どつかのいたずら者が、固い土を投げってきたので、法事がめちやめちやになったんですよ。いたずらな人もいるもんだ」といいました。若者は、

「なんだつて。あんたは、上の原のつつみのかえるだったのか。かえるといっしよには暮らせな

い。出て行ってくれ」といいました。嫁さんは、しよんぼり出て行ったということです。
いっちご、さっけい。鍋なべん下した、ガイガイガイ

村上郁再話

資料『吹谷松兵衛昔話集』野村純一編